

『天橋立図』を生み出した丹後半島神仏の世界

——密教僧智海の足跡を追って——

山 中 辰之佑

はじめに

本稿は室町時代の密教僧である智海の足取りを軸に、天橋立を中心とした丹後国与謝郡の宗教空間の形成過程について考察するものである。智海とは十五世紀後半に丹後半島で活躍した僧侶であり、少なくない数の作品、史料をこの地に遺した。

丹後の中世郷土史において最も主流な研究テーマの一つは、雪舟の描いた水墨画『天橋立図』をめぐる研究であろう。

『天橋立図』は絵画史研究としてのほか、郷土史研究の史料としても考察されてきた。そうした『天橋立図』をめぐる研

究の中で、雪舟に作画を託した依頼主を探る議論がある。依頼主の確定は、その他の研究課題である作画の「時期」、そして作品に込められた雪舟の「意図」などの議論にも密接に関係してくる重要な課題である。

その依頼主の候補の一人として比定されているのが智海である。^① そのほかに当時の丹後国守護である一色義直説、その守護代延永氏を推す説などがある。^② いずれにしても智海の存在は、その議論の中で重要な役割を占めている。しかし、こうした関心のもとに智海について議論が展開されることはあっても、智海という人物に焦点を当てて彼の経歴や思考について掘り下げた研究は豊富とは言いがたいのが現況である。本稿では、当該期の丹後に小さくない足跡を残した智海の実像に

迫り、少しでも故郷の郷土史研究の進展に寄与したい。

そうした具体的な考察に入る前にまずは、丹後地方郷土史における諸前提を共有しておく必要がある。なにぶん京都府内でも南部と比較して当該期について知られることの少ない丹後半島であるため、本稿に必要な必要最低限の情報を次章で述べる。さらに智海と関係の深かったとされる一色氏について二章・三章で概観しておく。

一 諸前提について

古代の人々にとって天橋立は神話の舞台として捉えられていた。『日本書紀』『古事記』では「天浮橋」という名称で登場している。「丹後国風土記逸文」には「イザナギノミコトが天に通うために梯子を掛けたが、寝ている間に梯子が倒れてしまい今のような形となった」というように天橋立の由来を解説している⁽³⁾。これが古代の文献に見える天橋立の姿である。

中世になると史料だけでなく、絵画作品でも天橋立を確認することができる。「天橋立図」が肉眼に映るままの風景で

はなく、「天橋立を軸とした宗教空間」を描いた作品であるということとは雪舟研究においても、郷土史的にも周知のことである⁽⁴⁾。この宗教空間を構成する寺院の中でも特に重要なものが、籠神社、智恩寺、成相寺であろう。これら三つの寺院にのみ朱が塗られており、ほかの寺院と比較して一際存在感を放っている。現存する「天橋立図」は下書き段階のものであったことが判明しており、完成図がどのようなものであったのかについて知ることはできない⁽⁵⁾。しかし、絵を描く段階で、雪舟が前述の三者を重要視していたことは間違いないであろう。

簡単にこれらの寺院を紹介しておく。まず成相寺は真言系の山岳寺院である。府中の背後に聳える鼓ヶ岳に位置し、丹後半島の山岳修験における拠点となった場所である。寺伝によれば慶雲元年（七〇四）の開山ということになっているが、中世以前のことはあまりはっきりしていない。西国三十三所霊場のひとつに定められ、近世以降は一般庶民を含めた多くの巡礼者が足を運んだ。本尊は観音菩薩であり、観音信仰の一大拠点であった⁽⁶⁾。今日の観光雑誌などを見ると、天橋立駅側の天橋立ビューランドより天橋立を捉えたアングルが

一般的である。しかし、中世頃までは成相寺からの眺望が主流であり、天橋立の全景を眺めるためには必然的に成相寺への参詣が必要となっていた。庶民層の各地巡礼が一般化する近世以前においても、多くの修験者が足を運び、天橋立を視界に収めていたことであろう。

籠神社は元伊勢信仰で知られている丹後の一宮である。後で詳しく考察するが、縁起である『丹後国一宮深秘』によれば豊受大神降臨の地として、伊勢遷宮以前に滞在していた聖域とされている。また、同社に伝わる『海部氏系図』は現存する日本最古の系図とされており、代々の宮司家である海部氏の流れを記している。この海部氏の始祖とされる彦火明命が主祭神として祀られている。かつて国府が置かれた中核都市、府中に位置し、都市の発展を支えた由緒ある神社である。成相寺、籠神社が天橋立北岸に所在していたのに対し、智恩寺は南岸の九世戸と呼ばれる所に位置している。開創当初は密教系の寺であったが、南北朝ごろに禅宗に改められている。⁷⁾五台山などの影響を受けた文殊信仰の寺であり、室町期には足利義満を始めとした多くの人々が京から足を運んだ。寺の縁起である『九世戸縁起』は籠神社の『丹後国一宮深秘』

と類似する点も多い。⁸⁾

これらの寺社は宗派や本尊に違いはあれ、同じ天橋立という空間の中で共存しつつ、ひとつの宗教空間を形成している。この空間を水墨画として表現したのが『天橋立図』である。そしてこの宗教空間の形成に尽力したとされているのが智海であり、その大檀那とされる丹後国守護一色義直である。

一一 一色氏と丹後国の出会い

室町期に丹後国の守護を務めたのは將軍家足利氏の流れを引く一色氏である。一色氏は管領に次ぐ要職である四職を担う名家のひとつであった。

一色氏の始まりは足利泰氏の子である公深が三河国吉良庄一色(愛知県西尾市一色町)を所領としたことが由来である。公深の子の範氏が鎮西探題となって頭角を現すと、貞治五年(一三三六)に範光が若狭守護に、加えてその子詮範の代に三河守護に任じられた。その後、尾張国海東郡・知多郡も領国とした一色氏は、詮範の子、満範の時に明徳の乱(一三九一)で山名氏清を打ち取った武功を評価され、丹後国が与え

られることとなった。これが一色氏と丹後国の出会いである。複数国の守護となった一色氏であるがまだこの頃は典型的な在京守護として京都に館を構えていた。室町幕府の要職を担い最盛期を迎えつつあった一色氏であったが、満範の子の義貫の代に肅清の憂き目を見る。かねてより折り合いの悪かった將軍義教により、出兵中であつた大和国三輪山の麓の陣中で当主義貫が誅殺されてしまう。永享十二年（一四四〇）のことであつた。主要領国であつた三河と若狭は没収され、義貫討伐の功があつた細川持常、武田信栄にそれぞれ与えられた。義貫の落命により、甥の教親がその跡を継いだが宝徳三年（一四五二）に没してしまふ。教親には継嗣がいなかつたため、義貫の遺児である義直が一色家を継いだ。

二 一色義直の丹後下向

義直がいつ生まれたのかは判然としていない。「師郷記」によると義貫誅殺の際に帯同していた三人の子は落命したと書かれている。また、翌日に京都にある一色氏の屋敷が襲撃された際に四人の義貫の子がおり、四人とも死を免れたとし

ている。四人の内訳は二十四歳が二人、十三・四歳、十二歳がそれぞれ一人であつた。二十四歳の兩名は義直の晩年の史料の年齢と矛盾が生じるので候補から除外されることとなる。さらに義直には義遠という弟がいたことが明らかであるため、義貫誅殺時十三・四歳であつた子が義直と考えられる。そこから逆算すると応永三十四年（一四二七）か正長元年（一四二八）の生まれと考えられる。⁹⁾

義直もそれ以前の当主に倣い、京都に拠点を置いて活動していた。御相伴衆として將軍義政のもとに仕え、日常的に行動を共にする機会も多かつたようである。また、寛正年間（一四六〇～六六）には義政が義直の屋敷を訪れることも習慣化していたようである。義教との関係悪化により父の義貫は命を落としたが、義直と將軍義政の関係は良好であつたことが窺える。¹⁰⁾

応仁元年（一四六六）になり京都を中心に応仁の乱が勃発すると、義直は西軍側としてこの大乱に参戦した。これは若狭守護の武田信栄が東軍についていたことが大きな要因である。信栄は義貫殺害に直接手を下した人物であり、一色氏の領国であつた若狭をそのまま拝領した宿敵のような存在で

あつた。当時の將軍義教の意向であつたとはいへ、兩者の關係は險悪なものであつたと考えられる。事實、この後も一色氏と武田氏はお互いの領地を巡つて何度も出兵している。長期戦となつた応仁の乱も文明六年（一四七四）には兩軍の講和が結ばれ、一応の終戦を見ることになる。西軍についてこれにより丹後守護を解かれていた義直であつたが、足利義政と対面する。嫡子の義春が家督を継承し、一色家は丹後守護職復帰に成功する。当時、義春はまだ九歳であり一色家の実権は義直にあつた。

応仁の乱は終結したが、地方では下克上の世が訪れようとしていた。多くの守護大名は在京生活をやめて自らの領国へと下向していった。そんな中で一色義直、義春父子は京都に残り將軍の補佐を続けていた。特に義春は將軍義尚と年齢が近かつたこともあり御相伴衆として身近に使えていた。しかし、その義春は文明十六年（一四八四）に十九歳の若さで亡くなつてしまふ。將軍の近い存在となり将来、積極的に幕政に参加していくことを期待されていた義春を失つた悲しみは、義直にとって小さくはなかつたであろう。そんな義直に迫り打ちをかけるかのように、文明十八年（一四八八）に一

色氏が管理していた禁裏御料所若狭国小浜が没収されてしまふ。没収された小浜の代官職は若狭守護であつた武田国信に与えられた。この処遇は禁裏からの一方的に告げられたものであつたが、將軍も禁裏を支持する姿勢を見せたため、義直は將軍に裏切られる格好となつた。前述の通り一色氏と武田氏は因縁の關係であつたため、義直の精神的打撃は大きかつたであらう。

嫡男義春の死と小浜没収は義直に、幕政に積極的に関わるための在京生活を断念させる契機となつたようである。この事件の後すぐに義直は丹後国に下向し、領国経営に専念する姿勢を見せる。その際に守護所として居を構えたのが天橋立北側にあたる府中であつた。¹⁾

四 智海について

これまで複数国の守護を兼任していた一色氏にとって丹後とはとりわけ馴染みの深い土地とは言ひ難いものであつた。特に丹後は最後に拝領した国であり、義貫以前の守護にはあまり重要視されていなかった。しかし、義直は在京中の長祿三

年（一四八九）に『丹後国惣田数帳』の更新を行うなど、丹後の国政に積極的姿勢見せ始める。さらに義直は宗教的な面からも丹後発展に尽力する。その宗教発展の先鋒的存在を担ったとされるのが、丹後一宮（籠神社）神宮寺である大谷寺の智海という僧侶である。智海は大谷寺の僧房である大聖院に居を置いていた。『本朝画史』に記された智海の条には次のようにある。⁽¹²⁾

僧智海、不知何許人、以梵様木筆、画不動尊及二童子、專極奇怪之勢、其画後云、智海七十五歳、明応十四年乙卯十一月一日、或画不動像十万余幅云、如此多、其筆之墨痕、在江州飯道寺中、余見之、

或七十五歳卜書

（梵字ア）智海（花押）

明応十四年十一月一日

近世において智海像はこのように伝えられており、木筆を用いて不動明王画を十万余り描いたとされている。動物の

毛ではなく木筆の使用に拘ったのは、修験系の僧として不殺生を貫いたからであろう。飯道寺とは近江国甲賀郡（滋賀県信楽町）に存在した天台系の寺であるが、廃仏毀釈により現在は廃寺となっている。このため『本朝画史』に登場する智海の作品の行方は不明である。しかし、丹後には彼の遺した作品や史料が数多く残っている。丹後で確認されている智海の足跡でもっとも早いものは、大谷寺に安置された不動明王坐像である。像底の墨書によると文正二年（一四六七）の制作となっている。大檀那は當国守護一色義直、願主は智海となっている。義直の丹後下向は文明十八年のことなので、少なくともその十年近く前から接点があったことになる。そのほか義直在京時代における智海との関係を確認できる重要な史料に智海請文がある。⁽¹³⁾

一宮 大聖院家之事

有夢想、自長祿三年^(依)卯巳至文明五^(癸)癸年、

十五年為御^(尾形) 義直朝臣大檀那、致

御子孫繁昌・^(天地)長久・国家豊穰御祈禱

長日不動護摩供、并不動尊金色坐像^(写)

(二) 童子立像^三、不動尊之心仁行基督薩御作

奉籠、此者源義直御守佛^{長五寸動、童子存之}、三間四面

堂舎、五間六間坊一字新奉建立迄、

仏具・両界本尊絵等在之、(以下後掲)

史料の前半部分にはこのように記されており、智海が一色の護持僧として不動護摩供を致し、不動尊像などの仏像や寺堂、僧房などの造立に携わったことが読み取れる。不動尊像の「心」(芯≡胎内カ)には、「行基督薩御作」の一色義直の守り仏を籠めたとある。『天橋立図』にみえる「不動」の書き込みが三間四面堂舎、そして同じく「大聖院」が五間六間坊にそれぞれ該当すると思われる。前述の文正二年作不動明王坐像こそこの史料に登場する「不動尊金色坐像」であろう。いずれにしても義直は長祿三年(一四五九)の頃には既に智海の大檀那であったことが分るので、かなり若い時期から領国の宗教政策にはある程度の関心があったことが示唆される。義直が三十代前半、智海は『本朝画史』やその他の作品の年齢表記から逆算すると三十代後半のことである。

大聖院が一宮籠神社の神宮寺である大谷寺の僧房であるこ

とは前述の通りである。かつて国府が置かれた府中の宗教施設(しかも当国の一宮)と強い結びつきを持つことは、義直にとつて領国経営の重要な第一歩であったと考えられる。さらに請文の後半部分に目を移したい。

然吾祖師仏法證明、山田権介御先祖依憑申、

今亦権介通忠朝臣為末代仏法證明、所奉憑実也、

於末世雖為弟子門徒、於破戒無懺僧者、

可為禁制、雖為他山客僧於持戒器用

以精進波羅蜜行被付仰者也、且国土安寧、

且御神法業、都為成諸人願望、於

乞請申状、粗如斯、

文明五年^{巳癸}八月時正 本願法印智海(花押)

この後半部分について『宮津市史』では、「そもそも智海が大聖院主となったのは、以前から山田権介通忠朝臣およびその先祖から大聖院主を嘱されていたらしい。」と解説されている¹⁴。さらに丹後郷土資料館ではこの史料を「智海が丹後の土豪山田氏に乞われて一宮大聖院の住持を引き受けるにあ

たつての請文」としている。¹⁵⁾

しかし、「於末世雖為被付仰者也」の部分を見てみると智海が自らの後継者を心配しているように読み取れる。仏法を犯すような僧侶ではなく身内ではない他山の客僧であつてもしつかりとした者を後継に据えるように書いている。当該の部分には「付け仰せらるゝもの也」とあつて、「被」という敬語表現を示す文字が用いられている。以後における大聖院の実際の管理を山田権介に委ねたことが明白である。

そうすると「然吾祖師仏法證明、山田権介御先祖依憑申、今亦権介通忠朝臣為末代仏法證明、所奉憑実也」の部分は山田氏の先祖の代に智海の師が懇意にしていた縁をたよりとして、今あらためて山田権介に宗教活動の支援を要請していると読むべきであろう。すなわち、大聖院の管理をこの山田権介なる人物に託そうとしていると捉えるのが自然である。従つて、末尾にいう「くゑふに於いては請け申す状、粗斯くの如し」とは「大聖院のことを山田権介に委ねて、国土安寧・御神法樂、惣じては諸人願望成就を乞つので、以上、大聖院のあらまし録して申し上げる」と解すべきである。請文とは元来、自身に対して優位にある者に提出する保証書のことである。

ある。

山田権介がどのような人物であつたのか詳しいことは不明であるが、「丹後国惣田数帳」によると与謝郡内に二十町以上の土地を有しており、丹後国内で一定の力を持った国人であつたことが窺える。¹⁶⁾

智海請文という史料は、大檀那であつた一色氏との関係が希薄となつた（後に義直は丹後に居を移しているので「断絶」とまでは言えない）智海が、山田権介に大聖院を先祖の代に倣い支えてくれるよう要請している文書だと解釈できる。文書の前半部分は不動堂と大聖院建立の経緯の説明であり、後半部分で自らの後を任せる僧侶を選ぶ際の申し渡しを書いている。しかし、なぜ智海はここで自分の後継者の心配をしているのだろうか。

五 智海の足取り

前述の通り一色義直は、先の請文が記された文明五年（一四七三）の段階では未だ在京であり、丹後に居を構えてはいない。義直が丹後に下向するのはこれより十年ほど後のこと

である。遠隔地に住む人物から、頼みとしうる在地の国人への「大檀那」の変更とはいえ、一色氏から山田氏へでは格下げの感は否めない。しかし、智海にとっても一色氏を大いなる頼みと期待できない状況があったのであろう。

智海請文に記されている長禄三年（文明五年の十五年間に焦点を当ててみたい。一色氏と智海の關係が確認できる最も早い段階の長禄三年は、義直が家督を継いで数年が過ぎた頃である。当時の義直は御相伴衆として將軍義政に近仕し、大名家への訪問に伴い、將軍御所内での行事への参加などが確認できる。父義貫の代にあつた將軍家とのわだかまりも解消され、幕府内において再び一色家が存在感を示し始めた時期と言えよう。京都で勢いを盛り返した守護家を自らの大檀那として期待を寄せることは、智海にとつて不自然ではないだろう。義直にとつても領国に自らの影響力を持ちたいという意図から、宗教政策の面で智海を支援したであろうことは前述の通りである。前述の大谷寺に安置されている智海が願主となつて造立された不動明王坐像の像底墨書には次のように記されている¹⁷。

當国守護大檀那一色義直 願主智海（花押）

大谷寺古

文^{（正二）}年^{（正二）}正月廿六日

奉造立

文正二年^{（正二）}正月廿六日

智海（花押）

この墨書より、少なくとも文正二年（一四六七）までは義直から智海の宗教活動に対して、財政的支援が順調に継続されていたことが想像できる。

しかし、この不動明王坐像が完成したわずか数か月後に京で応仁の乱が勃発し、一色家もこの大乱に身を投じていく。一色氏は西軍として参戦し、東軍と激戦を京で繰り広げた。ただし、これにより東軍の細川勝元を支持する義政によつて文明元年（一四六九）、義直は丹後の守護職を解かれ（この処置は一時的なものであり終戦後に復職）、新たに敵方の武田信賢が新守護として任命される。丹後には東軍の軍勢が攻め寄せるが、守護代である延永氏が中心となつて撃退してい

る。そのため、応仁の乱による守護解職によって一色氏領国としての丹後の実態が失われた訳ではなかったと考えられる。

とはいえ、京のみならず丹後も戦場となり、智海にとつて以前のように一色家から安定した支援を期待できる状況になかったのではないかと推測する。このような状況が続く中で、智海は一色氏の護持僧として活動することに区切りをつけ、文明五年に智海請文をしたためのに至ったのであろう。

前おきが少し長くなつてしまつたが前章の最後で提起した疑問点に立ち返りたい。智海がなぜ請文で自らの後継者を中心しているのか。『宮津市史』には次のようにある。

智海が一貫して一宮大聖院の住僧であつたことは、文明五年智海請文のほか、長享二年九月十日付『丹後風土記逸文』の奥書に「大聖院権大僧都真言大阿智海」とあり、また延徳四年（一四九二）求聞持虚空地藏菩薩図の紙背墨書銘に「丹後之国一之宮大聖院法印権大僧都智海」とあり、さらに明応十年（一五〇一）智恩寺多宝塔内部の大尊大日如来像の背後の板絵不動明王図に「大谷寺一宮大聖院阿闍梨法印智海」とあることから明白である。

このような見解が示されており、智海は大聖院造立からそ

の生涯を終えるまで、大聖院に居を構えていたとされている。¹⁸⁾

丹後郷土資料館発行の『修験僧智海とその時代 一五世紀の丹後』に智海がその生涯で残した史料・作品類をまとめた表【智海関係資料】が掲載されている。智海の足跡が非常に分かりやすくまとめられているので、別掲のとおり再録させていただいた。それを見てみると確かに大聖院の智海として署名された作品、史料は丹後半島東部に満遍なく分布しており、その主張は間違っていないように見える。しかし、その作品群の所在地を見ると、ある傾向があることに気付く。すなわち智海請文に記された文明五年までの一色氏の護持僧としての活動と、それ以降の智海の足跡には同じ丹後国内ではあるが変化が見受けられるのだ。詳細に述べると、文明五年以前は大谷寺大聖院を中心に活動しているのに対して、それ以降は永福寺不動明王二童子像が描かれた明応七年（一四九八）頃まで、智海の商品は加佐郡（現舞鶴市）に集中している。

これは智海が大聖院を留守にして加佐郡に滞在しながら活動していたと解釈できるのではないだろうか。加佐郡は大谷寺の所在する与謝郡の隣郡なので必ずしもこの期間中、常に

大聖院を不在にしていたとは断言できない。だが、一色氏の護持僧として大聖院に留るのをやめ、宗教活動を大聖院周辺から加佐郡にシフトしていたと言えるだろう。彼のそのような変化の背景には、若狭守護職をめぐる当該期の武田氏の軍事的攻勢があつたのかも知れない。

智海の活動時期を主な地域別に左記の三期に分類する。

長祿三年～文明五年までの大聖院での活動期間（一色氏護持僧）

文明十六年（六十四歳）頃～明応七年頃までの加佐郡（現舞鶴市）での活動期間

明応九年頃～最晩年の活動期間（智恩寺多宝塔再興事業）

と については前述のとおりであるが、についても説明したい。ここで晩年期としたのは、と のような十年以上の長期間に及ぶものではなく、智海最後の生存が確認される文龜三年（一五〇三）までのほんの数年間である。そしてそのほとんどが智恩寺多宝塔の再興事業に注がれた時期である。その多宝塔内部より発見された複数の墨書より、この再

興事業の願主が智海、その大檀那が守護代延永春信であることが確認されている。¹⁹ 智海が、文明十八年以降に丹後府中に向した一色義直と面会した可能性は否定できない。しかし、の時代以降、智海の宗教活動と一色氏を結びつける史料は確認されていない。この再建事業が延永氏を大檀那としていたという事実は、一色氏の衰退とそれに伴う領国丹後における守護代延永氏への権力移行を推測させる。

智恩寺の所在地は天橋立を挟んで籠神社の反対側の付け根部分にあたる。このため智海は少なくとも十五年以上に及ぶの期間を経て、再び活動の場を天橋立のある与謝郡に移したことになる。その頃 と同様に大聖院に居を構えていたと考えるのが自然であろう。

智海請文において智海が後継僧の人選に触れていたのは、いずれ大聖院（与謝郡）に復帰する可能性を見越して、不在の期間中に寺が廃れないようにしておきたかったのではないか。実際に智海が携わった智恩寺は、あの足利義満をはじめとした著名人たちが京から足を運んだ古刹であったが、文明年間頃には著しく荒廃が進んでいた。²⁰ そんな光景を日常的に目にしてきたからこそ、自身が不在時の大聖院、ひいては籠

神社に対する懸念が大きかったのかもしれない。

【補論】「丹後国風土記残闕」について

別掲【智海関係資料一覧】にもあるように智海は 〓期間中の長享二年（一四八八）に「丹後国風土記残闕」（以下「残闕」と記す）を書写している。丹後の風土記については後述の「丹後国風土記逸文」が存在するが、この両者は別物である。

「残闕」には、中世から近世にかけて、智海を始めとした複数人の人物による写しであるという旨の奥書が付記されている（智海写が最も古い時代²¹）。しかし、既に様々な先行研究により古風土記としては偽書と結論付けられている²²。現在の論点としては奥書に記載された人物のうち、誰がこの文献を作成したのかという所にある²³。

本稿の主題とは逸れるため、智海が真にこの文献を作成したのか否かという点には踏み込まない。この「残闕」は、〓期間中に加佐郡以外で確認される智海の足跡である。「残闕」がどのような経緯で竹野郡の竹野神社に収められたのかは不明であるが、「残闕」の文中で取りあげられている地域

は加佐郡のみに限定されている。つまり、仮に智海が作成者であるとすれば、彼が 〓期間中に加佐郡を拠点にしていたとする私説を補強するものとなる。作成者ではないとしても、私説に影響を及ぼすものではない。

六 智海の記した籠神社縁起の世界

宗教空間の形成を語るうえでその由来となる縁起は非常に重要である。智海は籠神社の別当僧として同社の縁起「丹後国一宮深秘」（以下「深秘」と記す）を記している。この史料には奥書が存在しておらず、残念ながら作成時期や原著者を示す記述がない。しかし、智海筆のその他の史料と筆跡が同じであるため、智海が筆記したものとされている²⁴。おそらく前章に示した 〓の時期に筆記されたものであろう。

この「深秘」は冒頭で触れた「海部氏系図」と共に籠神社の重要な縁起とされている。「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図」において宮司の海部光彦氏は「当社の元伊勢たる由緒が書かれた、極めて貴重な縁起書。」と述べている²⁵。

ではその智海が記した元伊勢たる由緒とはどのようなもの

か。海部氏前掲書に、村田正志氏の校訂翻刻による「深秘」全文が掲載されている。管見の限り、「深秘」全文を公開しているのはこれのみで、原本はもとより写真によって全体を確認する機会を得ていない。「深秘」は同社の秘宝として名高い一方、その内容については、地元においてすら必ずしもよく知られているとは言えない。ここではその一部分を引用し、智海の描いた元伊勢としての宗教空間を考察する。

丹後国一宮深秘 略して之を書す

神代に一の翁あり。塩土翁と號す。八人の天女降りて清流を浴す。清流は粉河なり。粉河と稱する故は、天女此にて酒を作る。其の水の色、粉流るるに似たり。故に粉河と云ふ。彼の天女に翁欲を起こす。天の羽衣を取蔵する間、聊く天に歸ることを得ず。然る間夫婦と成り、此處にて酒を作りて渡世す。伊勢の酒殿明神は、丹後国より勧請す。和朝の酒の根本是なり。彼の天女の在す所口傳在り。爰に虚空に常に光を放ち飛行し給う事、鳥の籠より光を放つが如し。此の天女勧請し奉り、再拜に應ふ。

耐へて降臨有りて、齋ひ奉る。

まずはこの冒頭部分について。天界より降りてきた天女の一人が、塩土翁とされる人物に羽衣を奪われ、天に帰ることができなくなり、下界での生活を余儀なくされるといふ物語である。「深秘」はこの後、天女の呼びかけに応じて天界より神が降臨するという展開へと繋がっていくのだが、智海が記したこの天女のエピソードと類似したものが丹後には遺されている。それは「丹後国風土記逸文」（以下「逸文」と記す）の「奈具社」の条である。

「逸文」は『和歌集』、『元々集』などに採録されたものが残されている。前章の補論で「残闕」の偽書たることを述べたが、「逸文」については言うまでもなく古風土記として信用に足るものであり、「奈具社」「天橋立」「浦嶋子」の三つの伝承を知ることができる。「奈具社」の冒頭部分には次のように記されている。²⁶⁾

丹後國風土記曰 丹後國丹波郡 々家西北隅方 有比治里 此里比治山 山頂有井 其名云眞奈井 今既成沼

此井天女八人 降來浴水 于時有 老夫婦 其名曰和奈
佐老夫和奈佐老婦 此老等至此井 而竊取藏天女一人衣
裳（以下略）

冒頭にいう丹波郡とは現在の京丹後市峰山町にあたる。今
日も峰山町と久美浜町の町境には比治山峠という地名が残っ
ており、近くに磯砂山、久次岳などに天女降臨の伝説が伝え
られている。²⁷⁾

老夫の名前「和奈佐老夫」が「深秘」では「塩土翁」であ
る点や、「老夫」「老婦」相並んでいるのが片や「翁」とのみ
記されている点など相違点がいくつかある。しかし、細やか
な違いは多少あれど天界から舞い降りた天女の一人が自身の
衣を隠してしまうという物語の大枠は「深秘」と共通して
いる。智海が「逸文」のこの「奈具社」条をモチーフとして、
「深秘」の導入部分を描いたことは間違いないと考えられる。²⁸⁾
さらに読み進めていくと、「深秘」は次のように展開して
いく。

人王三十代の御門崇神天皇の御宇に、天照大神与佐宮に

幸す。天照大神・國常立尊、籠宮大明神を禮して詞に云
ふ。其の後養老二年三月廿一日寅剋に今の地に御遷宮あ
り。一心我頂禮、久住舍尊、本來我一心、心衆生共加護
と。國常立尊、天照大神を禮し給ふ詞に云ふ。天宮舊願、
久遠正覺、法性如如、同在一所、此の如くして社に住し
給ふ。其の時此の神を豊受大神宮と號す。豊者は國常立
尊、受者は天照大神なり。兩宮の御名なり。然りと雖も
伊勢に於いては、天照内宮胎藏・豊受下宮金剛を兩大神
宮と云ふ。伊勢國御鎮座以前は、丹後國一社に雙住し給
へり。神秘口傳在り。されば伊勢の根本は丹後一宮与佐
社なり。

かなり神仏習合色の強い語り口ではあるが、元伊勢として
の由縁が描かれている。養老二年の遷宮というのは、奥宮で
ある真名井神社の地より、現在の籠神社の地へ遷宮した際の
ことであろう。そして天照大神と國常立尊この地に鎮座する
ことにより豊受大神宮と称したとされている。伊勢に於いて
は天照大神と豊受大神は、内宮と外宮という別々の二大神宮
であるが、丹後国では一社に住していることになっている。

ここには豊受大神とは、天照大神と國常立尊の二神のことのように描かれている。國常立尊は豊受大神と同一視されることもある神であるために新奇な説ではないが、そこに天照大神まで加わるのが「深秘」の特徴といえよう。内宮と外宮ではつきりと区別されている伊勢神宮とは明確に違いがある。さらに言及するならば、「深秘」が成立した中世に巻き起こっていた中世日本紀的な考え方は逆行した世界観であるといえよう。

中世日本紀的思考とは中世において最新であった学問、知識である仏教、道教、陰陽道などを用いて『日本書紀』を注釈することであり、中世に生きる人々にとってふさわしい『日本書紀』として再構築することである⁽³⁰⁾。それと連動した動きとして伊勢外宮の神官たちによる、豊受大神の格上げ運動があった。これは外宮トップの度会忠行（一一三六～一三〇五）を中心に行われたもので、内宮と対立関係にあった外宮が、祭神である豊受大神を内宮の天照大神と同格に引上げようとしたものである。『止由氣宮儀式帳』によれば豊受大神は天照大神の食事担当の神とされている。しかし、それでは内宮に対して神格で劣ってしまうと外宮神官たちは感じた

のである。豊受大神格上げの機運を背景に作成された神道書の代表的なものが「神道五部書」である。

このように鎌倉後期より伊勢では『日本書紀』に対して中期ならではのオリジナルな解釈が施されていた。しかし、「深秘」ではまるで天照大神と豊受大神を同一視するかのような、同時期の伊勢外宮が歩んだ路線とは相容れない説明がなされている。一方で、籠神社には「神道五部書」のひとつである『倭姫命世紀』が遺されており、中世日本紀と全く無関係であったとは言い難い。それにも関わらず智海がこのような縁起を記しているのは彼の思想が伊勢神道と隔絶した世界にあったことを示している。

さらに読み進めると、後半部分には次のような記載が見える。

中に橋立大明神は本地文殊師利菩薩、三世諸佛の智母、十方薩埵の本師なり。又御垂迹を橋立明神と申す事の表れこれ多し。

この部分は文殊菩薩を本尊とする智恩寺の縁起である。九

世戸縁起』の影響を受けていると考えられる。³¹⁾「深秘」、『九世戸縁起』ともに奥書はなく、どちらも詳細な成立年代は不明であるが、文章全体のまとまりから考えても『九世戸縁起』の方がオリジナルと考えるのが妥当であろう。

「深秘」にはこれ以降も、他史料からの二次流用的な部分が見受けられる。

善女竜王の乙姫は、是れ守護し給ふ江姫明神と云々。彼の九世戸の洲崎に、一念が淵とて在り。これは龍宮城又仙宮へ通る門なり。明神の社壇も彼に御座す。中比水練の上手海に入りける程に、不慮の外に、此の社壇を押し奉りけり。其の體たる、金精玉英を丹墀の内に敷き、瑠璃珠、珊瑚、玄園の表に滿つ。玉樹結根開花の趣なり。誠に是れ烈仙の砌、海神の栖なり。即ち奇特の思ひを成して歸りけり。又後に彼の處に入りけれども、更に見申し侍り奉らず。亦古傳に、蓬萊は、此の國に有りと見へたり。昔秦の皇帝、漢の武、年々に靈藥を海水漫々として覓むるに處なし。

この部分に関しては元伊勢としての由縁とはおおよそかけ離れた語りとなっている。内容的には丹後半島にも存在する浦島太郎伝説や徐福伝説などの影響を強く受けている。前述のとおり、浦島伝説は「逸文」にも「浦嶋子」の条として採録されており、これが現存する浦島伝説の最古のものである。「逸文」において浦嶋伝説の舞台となるのは、宮津市より北へ位置する伊根町である。伊根町には浦嶋子（浦島太郎）を祀った宇良神社があり、室町時代のもつとされる「浦嶋明神縁起」が遺されている。

また、伊根町には徐福を祭神とする新井崎神社も存在し、徐福上陸の地とされている。浦嶋伝説や徐福伝説はともに海洋信仰から生まれた説話である。³²⁾新井崎神社については、社伝では創建は平安時代としているものの、史料から確認できて遡れるのは文禄年間（一五九三—一五九六）までである。「深秘」成立の一世紀ほど後のことになるが、智海存命中、あるいはそれよりもっと以前からこの地に徐福伝説が根付いていたと考えてもおかしくはないだろう。

このように「深秘」は元伊勢の由来を語るとしながら、地域伝承や他山の縁起など諸々のエピソードを取り込んでおり、

且つ神仏習合色を前面に出した書物となっている。また、豊受大神を天照大神と同一視するような描写も、中世の伊勢外宮の動きにはそぐわない、この地独自のものである。

七 造替記事（式年遷宮文書）について

「深秘」には縁起譚に続き、「一當社造替の事」から始まる社殿改修の歴史が綴られている。この部分にとくに題名は付けられていないが、籠神社では「式年遷宮文書」と題して、「深秘」とは別史料のように扱っている。これによると三十年おきに社殿の改修を行っており、既に二十度以上の改修が行われたとしている。また、建保年間（一一三三―一一三九）から文永年間（一一六四―一一七五）にかけてコンスタントに改修が行われていたがその後、改修が滞ってしまったとされている。そして最後は延慶三年（一一三〇）の造替無沙汰のいきさつを記したあと、次のように締め括られている。

既に六十九年の春秋を送るの間、大破重畳極まり無く、神殿悉く朽損す。仍て玉體顕現、神慮量り難し。争でか

嚴密の御沙汰無からんとや云々。

「六十九年」とは文中の延慶三年を起点にしていると考えると、末尾の「争でか嚴密の御沙汰無からん」までが一三七〇年頃の史料ということになる。智海の生まれるおよそ半世紀ほど前の時代である。「とや云々」とは、それまでの文章を書写した人物の語りであるため、智海がこれを書写したことを意味する。また、「深秘」の冒頭部分にも「略して之を書す」という記載が見られる。こちらは「深秘」原文を抄写したという意味であろう。つまり智海は、冒頭に「略して之を書す」と記述し、終盤に南北朝期の「今」を用意して「云々」と締め括ったことになる。これは彼が、「深秘」が南北朝期に成立した縁起であるかのように装い、自身をその古書の書写者に凝らした可能性が考えられる。

おそらく智海は大聖院に滞在していた際に、籠神社の別当僧として神社所蔵の史料類、丹後半島の伝承類をかき集めて一書成し『丹後国一宮深秘』としたのではないだろうか。¹⁸⁾ そのように考えた場合、造替記事について文末に「云々」とあるので、縁起譚においても智海がなにかの史料を参考に

「深秘」の一部として作成したことは間違いない。また、このように考えると、雑多な要素が入り混じる「深秘」の内容にも納得がいく。

おそらく智海が「深秘」を作成したのは、智海請文作成の文明五年以前のことであろう。一色氏が大檀那となって大聖院が造立されるまで、「大破重畳極まり無く、神殿悉く朽損す」という籠神社の状態が、どの程度改善されていたのかわからないが、一色氏により神社本体にも修繕の手が及んだ可能性は十分に有り得る。

まとめ

これまでの郷土史において智海は、一色氏と強固に結びつき丹後国内の宗教発展のためにその生涯を捧げた人物、というように解釈されていた向きがある。しかし、智海の大聖院住が一貫して確認できる史料とされてきた智海請文によく目を向けてみると、むしろ一色氏との決別を示唆する内容に読みとれる。それまで大聖院を中心に残されていた智海の足跡が、「智海請文」を境に加佐郡にシフトしていることが重要

な状況証拠であろう。

また、『丹後国一宮深秘』を筆記したことを引き合いにして、「神道教義にも造詣が深かった」と智海は評されている³⁴。だが、実際に「深秘」に書かかれていることからすると、智海が神道に対する専門的知識を持ち合わせていたとは言い難い。宗教家としてはむしろ、外宮の中世日本紀という当時の趨勢も含めて、神道書に不案内であった可能性が高い。彼の立ち位置が神仏習合思想であることは明白であり、一方で伊勢神宮は僧侶の参拝拒絶で知られる³⁵。

智海が「深秘」を作成した動機がどのようなところにあるのか不明である。南北朝期の「式年遷宮文書」と同じように、籠神社修繕を有力者たちに求めるものであったのか。そうであれば最初から一色氏に向けて智海はこの縁起をまとめたのか。智海の真意は測りかねるが、自身の宗教活動に援助を提供してくれる人物を求めて「深秘」を書いたのだろう。

本稿での考察からすると、智海とはたしてどのような人間であったのか。従来言われてきた、一色氏とともに丹後の宗教的繁栄に尽力した人物というより、政治状況に即応して檀那や自らの宗教拠点を切り替えていくことをいとわぬ、権

威頼みではない柔軟で精力的な宗教家という印象が強い。

「政治的権力との結びつき」自体は先行研究で指摘されているとおりで否定するものではない。しかし、守護一色氏依存からの脱却や「深秘」の内容を考慮すると、世俗信仰や現世の機微に敏感な智海の人物像が浮かび上がってくる。

さらには、その智海の足跡が暗示する丹後国内の延永氏台頭という政治状況の推移は、「天橋立図」の依頼主を議論するうえで無視できない論点となってくるのではなからうか。

註

- (1) 中島純司「真景の真実 雪舟筆『天橋立図』の成立について」『MUSEUM』四七二、一九九〇年など。
- (2) 一色義直説は、伊藤俊一氏が『宮津市史』通史編上巻、第九章第一節、宮津市史編さん委員会、二〇一〇において提唱されている。延永説については、伊藤氏を含め複数の方がその存在に触れられていたが、どの文献を参照されたのか記載されておらず、根拠を確認できなかった。
- (3) 上杉和央「神話、文学の中の天橋立」『天橋立学』への招待 海の京の歴史と文化「天橋立世界遺産登録可能性検討委員会、二〇一七年。
- (4) 島尾新「もっと知りたい雪舟 生涯と作品」、東京美術、

二一二年。

- (5) 前掲(4) 島尾氏著書参照。
- (6) 本稿では成相寺について詳しく触れないが、高倉瑞穂氏が「成相寺靈験譚の一考察」『佛教学大学院紀要 文学研究科 篇』三九号、二〇一一年にて詳細な考察をされている。
- (7) 前掲(2) 書第六章第六節等参照。
- (8) 前掲(6) 高倉氏論文参照。
- (9) 片岡秀樹「丹後一色義直の守護者 府中の館と慈光寺について」『地方史研究』四一 地方史研究協議会、一九九一年。
- (10) 前掲(2) 書第九章第一節参照。
- (11) 前掲(9) 片岡氏論文参照。
- (12) 石川登志雄『修験僧智海とその時代 一五世紀の丹後』京都府立丹後郷土資料館、一九八九年。
- (13) 前掲(12) 書より引用。
- (14) 前掲(2) 書第九章第三節より引用。
- (15) 前掲(12) 書より引用。
- (16) 『宮津市史』史料編第一巻、宮津市史編さん委員会、一九九六年。
- (17) 前掲(12) 書より引用。
- (18) 前掲(2) 書第九章第三節より引用。
- (19) 天沼俊一「智恩寺多寶塔其他」『藝苑』第一編八・九一九二年。
- (20) 智恩寺については彦龍周興により『九世戸智恩寺幹縁蔬併

- 序」が作成されるほど荒廃が進んでいた。智海らによる多宝塔再興事業もその活動の一環と考えられる。
- (21) 福岡猛志「丹後国風土記残欠」の基礎的検討』愛知県史研究』十七 二〇一三年。
- (22) 邨丘良弼「丹後風土記偽撰考」、『歴史地理』三巻五号、一九〇一年。
- (23) 加藤晃「火明命と「丹後風土記残欠」』『両丹地方史』七四 両丹地方史研究者協議会、二〇〇四年。
- (24) 前掲(12) 参照。
- (25) 海部光彦「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図」元伊勢神社社務所、二〇一二年。
- (26) 『日本古典文学大系2 風土記』岩波書店、一九六四年。
- (27) 藤村裕孝「丹後国風土記」逸文・奈良社の比治山はどこか』『両丹地方史』七九 舞鶴地方史研究会、二〇一〇年。
- (28) 「奈良社」に登場する天女は最終的に、竹野郡の奈良神社にたどり着いたとされている。末尾に「斯所謂竹野郡奈良社坐豊宇賀能賣命也」とあり、この伝承では天女が豊受大神であると記されている。当然、智海もこの点を念頭に「奈良社」を「深秘」のモチーフのひとつとして選択したと考えられる。
- (29) 章佳「根源神・国常立命の説明方式から見る理当地神道の「神」概念」『日本思想史学』四七 二〇一五年。
- (30) 斎藤秀喜『読み替えられた日本書紀』角川選書、二〇二〇年。
- (31) 小室洗心『天橋立集』あまのはしだて出版、一九九五年。
- (32) 上田純一「海上世界観の普遍的価値の証明」『天橋立学』への招待 海の京の歴史と文化』天橋立世界遺産登録可能性検討委員会、二〇一七年。
- (33) この可能性に関しては宮司の海部氏も前掲(25)の著書内で触れておられる。
- (34) 前掲(12) 参照。
- (35) 例えば『沙石集』「大神宮の御事」段においては、仏僧の参詣を伊勢神宮側が拒否している描写がある。少なくとも表向きは神仏を分離していたことが窺える。
- 引用史料典拠一覧(五十音順)
- ・大谷寺不動明王坐像像底墨書
 - 石川登志雄『修験僧智海とその時代 一五世紀の丹後』
 - (京都府立丹後郷土資料館図録) 同館、一九八九年。
 - ・「丹後国一宮深秘」
 - 海部光彦「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図」元伊勢神社社務所、二〇一二年。
 - ・「丹後国風土記逸文」
 - 秋本吉郎『日本古典文学大系2 風土記』岩波書店、一九五八年。
 - ・智海請文
 - 前掲石川氏編丹後郷土資料館図録より。未読文字については所収写真により一部を読解復元し、欠失文字については推定を傍記した。

・『本朝画史』

笠井昌昭 訳注 『本朝画史』 同朋舎、一九八五年。

参考文献一覽(五十音順)

・海部光彦 『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図』 元伊勢神社社務所
二〇一二年。

・韋佳 『根源神・国常立命の説明方式から見る理当心地神道の
「神」概念』 『日本思想史学』 四七 二〇一五年。

・石川登志雄 『修験僧智海とその時代 一五世紀の丹後』 京都
府立丹後郷土資料館、一九八九年。

・上杉和央 『神話、文学の中の天橋立』 『天橋立学』 への招待
海の京の歴史と文化』 天橋立世界遺産登録可能性検討委員会、
二〇一七年。

・上田純一 『海上他界観の普遍的価値の証明』 『天橋立学』 への
招待 海の京の歴史と文化』 天橋立世界遺産登録可能性検討委
員会、二〇一七年。

・片岡秀樹 『丹後一色義直の守護者 府中の館と慈光寺について』
『地方史研究』 四一 地方史研究協議会、一九九一年。

・加藤晃 『火明命と「丹後風土記残欠」』 『丹後地方史』 七四 丹
丹地方史研究者協議会、二一 四年。

・小島孝之 『新編日本古典文学全集52 沙石集』 小学館、二〇〇
一年。

・小室洗心 『天橋立集』 あまのはしだて出版、一九九五年。

・斎藤秀喜 『読み替えられた日本書紀』 角川選書、二〇一〇年。

・島尾新 『もつと知りたい雪舟 生涯と作品』 東京美術、二一
二年。

・高倉瑞穂 『成相寺靈験譚の一考察』 『佛敎大学大学院紀要 文
学研究科篇』 三九号 二〇一一年。

・天沼俊一 『智恩寺多寶塔其他』 『藝苑』 第一編八・九、一九二
年。

・中島純司 『真景の真実 雪舟筆「天橋立図」の成立について』
『MUSEUM』 四七二 一九九〇年。

・藤村裕孝 『丹後国風土記』 逸文・奈良社の比治山はどこか』
『丹丹地方史』 七九 舞鶴地方史研究会、二〇一〇年。

・福岡猛志 『丹後国風土記残欠』 の基礎的検討』 『愛知県史研究』
十七 二〇一三年。

・宮津市史 『史料編第一巻 宮津市史編さん委員会、一九九六
年。

・宮津市史 『通史編上巻 宮津市史編さん委員会 二〇一二年。
・邨丘良弼 『丹後風土記偽撰考』 『歴史地理』 三巻五号 一九〇
一年。

(中京大学文学部在學生)

木造不動明王坐像	文正 2 (1467)	宮津市	大谷寺	像高92.0
金剛胎藏界大日二尊・阿弥陀 一尊種子板碑	文正 2 (1467)	宮津市	大谷寺	地上高122.0
錫杖頭	文明 3 (1471)	峰山町	縁城寺	頭部長24.7
紙本墨書智海請文	文明 5 (1473)	宮津市	籠神社	縦27.8×横48.8
紙本墨画不動明王二童子像	64歳	舞鶴市	松尾寺	縦96.3×横37.8
紙本墨画不動明王二童子像	67歳	舞鶴市	松尾寺	縦84.3×横34.1
丹後国風土記奥書	長享 2 (1488)	丹後町	竹野神社	縦24.6×横16.7
絹本著色五大明王図紙背墨書	延徳 4 (1492)	舞鶴市	松尾寺	縦75.0×横26.6
絹本著色求聞持虚空蔵菩薩像 紙背墨書	延徳 4 (1492)	舞鶴市	松尾寺	縦89.2×横40.6
紙本墨画不動明王二童子像	74歳	舞鶴市	多禰寺	縦94.3×横41.8
不動明王二童子像	明応 4 (1495) 75歳	滋賀県	飯道寺	
紙本墨画不動明王二童子像	明応 5 (1496) 75歳	伊根町	西明寺	縦92.1×横43.2
紙本墨画不動明王二童子像	明応 7 (1498) 77歳	舞鶴市	永福寺	縦84.6×横38.3
紙本墨画不動明王二童子像	明応 9 (1500) 80歳	峰山町	縁城寺	縦80.1×横39.0
多宝塔内部墨書	明応 9 (1500)	宮津市	智恩寺	
多宝塔内部板絵不動明王像	明応10 (1501)	宮津市	智恩寺	
多宝塔内部板絵不動明王像	80余歳	宮津市	智恩寺	縦84.0×横100.0
多宝塔内部墨書	明応10 (1501)	宮津市	智恩寺	
絹本墨画不動明王二童子像	文亀 2 (1502) 80余歳	峰山町	縁城寺	縦108.8×横38.5
絹本著色阿弥陀三尊像紙背墨書	文亀 3 (1503)	宮津市	智恩寺	縦147.5×横57.7
絹本墨画不動明王二童子像		宮津市	国分寺	縦93.2×横38.8
紙本墨画不動明王二童子像		舞鶴市	円隆寺	縦70.9×横31.8
錫杖頭		宮津市	金剛心院	頭部長17.8
紙本墨書丹後国一宮深秘	文明年間ごろ	宮津市	籠神社	縦30.9×横369.0

「修験僧智海とその時代 ― 五世紀の丹後 ― より抜粋

(左から資料名、時代、所在、法量の順。は市町指定文化財)